

小さなあざが持つ大きな力
あいまいな『あざ』をめぐる微視的相互作用の分析

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター
櫻本 和也

本稿は自分自身が顔にあざを持つ背景から、自身の顔に存在するあざを研究対象として焦点を当て展開している。人間の容貌が重要な要因として認知されることは、先行研究からも明らかなことであると同時に、現代社会における社会的通念として広く認識されているであろう。こうした現代社会において生きづらさを感じる自身を背景に、可視性の高い顔に存在するあざがどのように対人関係の中に機能し意味付けられているのかについて、当事者と他者との間に生じる相互作用の影響を明らかにすることを本稿の目的としている。

人間の外見にかかわる諸問題は個人に加え、他者の存在があることで初めて生じてくるものであることから本稿においては、他者の語りを半構造化面接で抽出し、GTA abbreviated version(グラウンデッド・セオリー・アプローチ簡略バージョン)を用いての質的アプローチによる分析を行っている。結果として友人関係にある他者によって、(1)当事者の顔に馴染むあざとしての意味付け、(2)関係のあり方で変化する扱われ方、(3)人間に存在する道德規範、(4)あざに対する意味付けと認識の差異が、加えて両親からは(1)父親と母親との間における認識の差異、(2)両親の安定形成が明らかとなった。

友人関係にある他者の語りから抽出された人間の容貌に触れる際の配慮、及び自制の念といった道德規範は、語りを行った対象者自身に多大な影響を及ぼすものであった。現代の外見及び容貌を扱う際の抑制的背景は、こうした配慮の念により構築されると考えられ、当事者と他者との間における相互作用に影響を及ぼす可能性が示唆された。従って双方の間におけるあざに対する認識のずれの背景には、人間の道德規範が重要な影響を及ぼす一要因として存在していると考えられる。また友人関係にある他者の全員から、あざを特別な意味付けのなされない特徴としての語りが抽出されることとなったが、関係構築における初期段階や状態のあり方によって、そうした特徴の意味付けに変化が生じる可能性についても同時に示唆されていることは、当事者にとって重要な点であると考えられよう。

次に母親と父親との間であざへの捉え方が異なる点について、前者の母親におけるあざは自責の念が喚起される存在として、後者の父親は特徴のある子どもを持つことによる不安が喚起される存在としてそれぞれ意味付けられている。特にあざのある子どもを出産したことに対する母親の自責の念は、無事に子どもを出産することを暗黙裡に期待される女性の、性役割意識から促されていることが考えられる。そうした両親のあざに対する認識を変容させた要因は、子どもの順風満帆な生活態度、及び他者との比較から見劣りしない子どもの姿の確認であり、双方にとって大きな影響を及ぼしうるものとして存在している。